

ソロモン諸島

中野和敬

ソロモン諸島という国名は、日本ではあまりなじみがないかもしれない。けれども、その国の首都ホニアラがガダルカナル島にあると聞けば、それならわかるという年輩の方がかなりおられよう。同島は太平洋戦争の陸上戦で、旧日本軍がアメリカ軍にはじめて大敗を喫した戦場のある島で、ホニアラはまさにそのかつての激戦地のまっただなかにある。その戦いで、2万名を越える日本の将兵がなくなったが、その死因の大半が直接または間接的に栄養失調であったため、日本の戦史作家はしばしばガダルカナル島のガを“餓”にあて、“餓島”と呼んでいる。地理学上のソロモン諸島は、日本から赤道を越えてほぼま南の方向にある世界第2位の大島ニューギニア島の東に2列に連なる列島のことをいうのであり、パプアニューギニア領で、その列島中面積的に最大のブーゲンヴィル島をも含むが、国としてのソロモン諸島はブーゲンヴィル島より東にある島じまからなる（地図参照）。また、ここはメラネシアの中心域に位置しているともいえる。以前は政治的に英国の保護領であったけれども、1978年英連邦の一員として独立を達成した。以上のいきさつから、同国の現在の元首は英国のエリザベス女王であり、ホニアラには総督がいる。

表1には、1986年の国勢調査をもとに同国に関する基礎データが示してある。なお、当時は、地図にあるようなチョイスル州とウェスタン州、また、セントラル州とレンネル・ペロナ州それぞれ

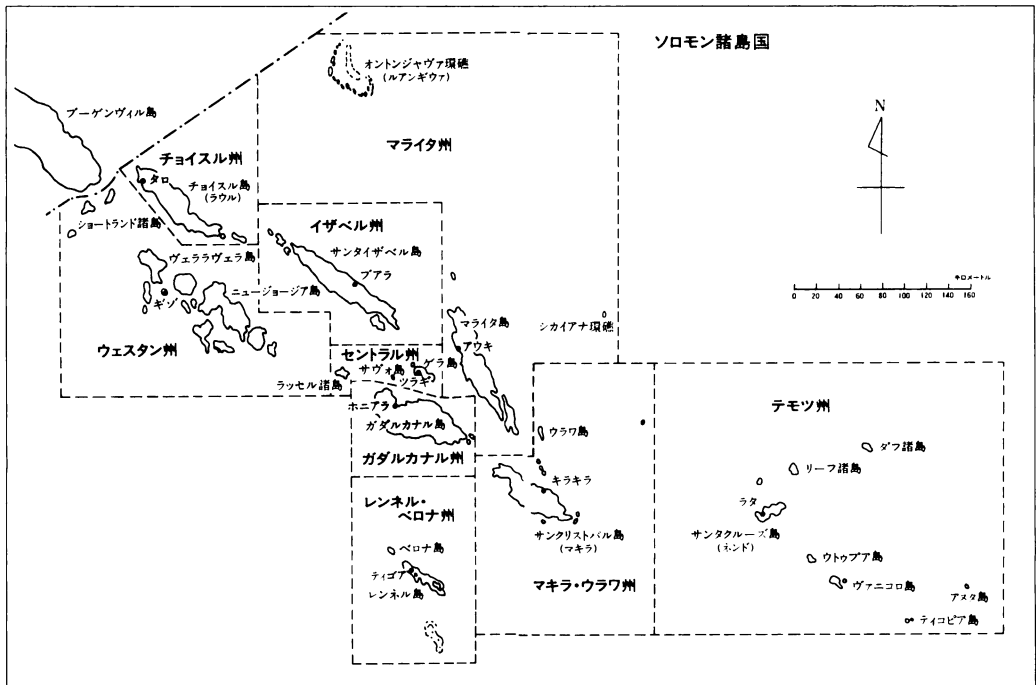


表1. ソロモン諸島に関する基礎統計
州別陸地面積, 1986年国勢調査時における人口および人口密度

州名	面積 (平方キロ)	人口 (人)	平均人口密度 (人/平方キロ)
チョイスル+ウェスタン	9,312	55,250	5.9
イザベル	4,136	14,616	3.5
セントラル+レンネル・ペロナ	1,286	18,457	14.4
ガダルカナル	5,336	49,831	9.3
ホニアラ(特別区)	22	30,413	1382.4
マライタ	4,225	80,032	18.9
マキラ・ウラワ	3,188	21,796	6.8
テモツ	865	14,781	17.1
全国	28,370	285,176	10.0

全国の人口増加率は年率3.5%のため, 現在の推定総人口は約388,000人, 平均人口密度は13.7人/平方キロ。

(参考: 日本に関する1990年のデータ)

日本全国	約378,000	約124,760,000	335
鹿児島県(含離島)	9,185	約1,790,000	196
宮崎県	7,734	約1,170,000	175

の分離がまだすんでいなかった点, 注意を要する。この表からわかるとおり, 同国の全陸上面積は宮崎県の約3.7倍であり, 平均人口密度は離島を含む鹿児島県の人口密度の10分の1よりもまだ大分低い。ただし, 現在の人口増加率はこの表にある数値からもわかるように, 世界的に見ても, 最も高いグループに入っている。

気候は, 国内のほとんどの地域について高温多湿とってよい。しかも, きびしい乾季が数カ月以上続く地方はいくらもない。

そこに生活している人びとのくらしぶりがどんなものか, 鹿屋体育大学に留学中の学生, グレース・ノセー・ヒリーさんの体験的な話から思いめぐらすことにしてみるのも, よいかと思われる。そこで, これから彼女の話を聴くことにしよう。

「みなさん, はじめまして。ご承知のように, わたくしの名前はグレース・ヒリーといいまして, 島じまがかわゆく集まっている所から来ました。そこはソロモン諸島といい, 南太平洋にあります。今日はそこでのわたくしの生活ぶりとそれに関して考えていることを少しばかりお話するようにとのご依頼を受けました。

わたくしは1975年12月19日ソロモン諸島の首都のホニアラで生まれました。父母のはじめての子です。幼稚園と小学校時代はその島じまにいました。子供時代はほとんどそこで過ごしたわけですが, 当時のことでおぼえていることと申しますと, 学校での勉強とそのほかの活動以外にはなにもあり

ません。わたくしは学校ですることには何でも本当に積極的に参加しました。お勉強のほかに、運動もしましたし、バスケットボールやネットボールでも遊びました。また、学校の合唱団にさえも入りましたし、土地のおどりや工芸もしました。かよった学校はヨーロッパ人が設立したもので、わたくしの考えでは、ほかの小学校より少しばかり進んでいました。今は“ホニアラ国際小学校”とっています。英語が公用語となっています。もっとも、みんなはパプアニューギニアやバヌアツで使われているのと同じようなピジン英語も話します。ほとんどの学校では英語で授業をする方針です。けれども、いなかの学校では、実際その方針どおりになるのはまだこれからのことです。ソロモン諸島での教育の全般的な目標はそれが人びと全部の権利であると認識すること、そしてだれでもが初等、中等、高等教育を受けられるようにすることです。それで、国の要求に応じて人びとの職業的ならびに技術的技能を高めるために人的能力の練磨がなされるのです。

まだ13歳になる前に、普通は寄宿学校として知られているニュージーランドの高等学校に入るために国を離れました。これがわたくしにとって両親から離れる最初の時ではありませんでしたが、ソロモン諸島を出る最初の機会ではありました。思い返してみると、これが旅をして未知への冒険をすることへの情熱のはじまりでした。ともかく5年もの長い間高校で勉強をしました。もっとも、長いようには思えても、年月はあっという間に過ぎました。ティーンエイジ時代のほとんどを家から離れて過ごしました。けれども、毎年年末、学校が休みになると、家族に会えるといつも楽しみにしていました。毎年1回クリスマスの休みには帰ります。キリスト教国として、クリスマスこそはキリストの生誕を象徴するものです。クリスマスはまた、国中で家族と友達が故郷に帰る時と考えられているのです。家族と親戚が一堂に会するのは古くからの伝統です。その際、国中でみんなお祝いすることを楽しみにしています。教育のために国を離れたのはわたくしだけではありません。わたくしよりも以前に離れた人が少なからずいます。大学に入ったり、仕事をする目的だったり、もっと勉強をするためだったり、あるいはしばらくの間ソロモン諸島から出ていたけれども帰って来たりするといった人が少なくありません。家に帰るのはわくわくするような感じです。それまでの1年間に起こったかもしれない変わったことが、どのようなものなのかということへのはっとするような気持ちとか胸のときめき。人もまた見ないうちに変わります。そして、このことについて、外国にいる間に抱いたそうした想像とわくわくする感じがわいて来るのです。

家族から離れていても、家庭とか友達からは多くのことを学びましたし、ある意味でわたくしの視野をひろげてくれました。寄宿学校は、なんとかして若いティーンエイジャーを養成または方向づけしようとしています。その結果は良いこともあるし反対のこともあります。わたくしのばあいは、その両方でした。高校時代、わたくしは独立心が旺盛となりました。ひょっとして旺盛過ぎるようになったのかもしれませんが。両親がずっとわたくしのくらしや幸せを気づかってくれているということを忘れがちでしたから。しつととか他人への思いやりも成果です。わたくしはまた自分の弱点と良い点を知りました。自分を違ったふうに見たばかりでなく、わたくしの国をひとつの国家として見ました。考えてみると、最も大事だったのは家族との関係です。それまで以上に、家族と

の親密感を感じました。遠く離れていると、お互いの感情が引き合う力と近づこうとする思いの増すことが往往にしてあります。

わたくしにとっては、どんな所へ行こうと、いようと、ソロモン諸島はいつもふるさとです。わたくしがおもしろく感じるのは都会生活ではなくて、いなか、または村の生活です。村にいる人たちをたずねるのは大好きです。それは本当にわたくしにとってはすばらしい旅です。そこでの生活ぶりはまったくすてきです。それは多分、東京と鹿屋との間でわたくしが今経験している違いのよなものです。生活条件と生活ぶりの違いはまったくはっきりしています。たとえば、空気は小さい子供のわたくしでさえ気がつくほどきれいで、すがすがしいのです。そこにいる人たちはほとんどが親戚で、雰囲気はのびのびとしています。親戚の家へ行くことは長い休みの間でもメダマのうちのひとつです。石焼き料理も都会では、たびたびはしないことのひとつです。食べ物の味の違いこそが村での生活ぶりに色を添えます。食べ物と人びとがすべてではありません。景色もそうです。村人たちの自然の中のくらしはみごとです。着るものとか、時間がどうだとかお化粧とか、などなどに気を使う必要は全然ありません。そこはただゆったりと、しかもすばらしい時を過ごせるすてきな所です。

幼稚園に入った時から、わたくしはほとんど町なかでくらししました。そしてホニアラでは、国中からやって来た人たちが町でくらし働いています。その中には外国人もいます。そんなわけで、英語かピジン英語で話しをしました。わが家では当時、そのほかの方言はほとんど話しませんでした。いわれた時はわかるのですけれども、こういう事情で子供時代にちょっとばかりと惑ったことがあります。母の実家の村へ帰っている間、親戚や友達がわたくしのうちではほとんど使わない方言をしゃべるので、その人たちと話しをするのに困りました。途方にくれましたが、村へ何回も帰るにつれて少しずつ方言がところどころわかるようになりました。ところが、この方言は母の村の方言で、父はまた違った島の出身で、父の村ではまた別の方言がありますし、こちらの方はほんの少ししかわかりません。今でさえ、父の方言は十分に使いこなせるようにはなっていません。

記録されているものだけでも、ほとんど100に達する土地のことばや方言がありますけれども、書きことばになるほど十分に通じるのはそのうちのほんの二、三です。島ごとにことばが違いますし、島の中でもまた方言が違います。語彙は似ているのですが、中身とかたちがまったく同じというわけではありません。

メラネシア人が人口の大多数、90%以上を占めますが、ポリネシア人、ミクロネシア人、ヨーロッパ人それに中国人をふくめてそのほかの人びともいます。わたくしが強く感じるのは、ソロモン諸島が多民族しかも多文化の国ということです。今話しましたような特徴が目立っている社会に生まれて、平等の大切さを学んで理解しました。わたくしの国にいる外国人は人びとの中のごく普通のひとりとして遇されます。はだの色、民族またはことばは違っていても、みんな同じです。ソロモン諸島では人の分け隔てまたは差別が問題になったことはありません。

考えますと、そのような国に育ったことが強さと国際交流をする勇氣、そしてはじめての国での

新しい生活様式と文化に順応する能力をわたくしに与えてくれたのです。わたくしはこのように育てられたことに感謝しています。

文化は、方言がそうでありますように、島じまで違います。ポリネシアとミクロネシアの伝統の影響を受けた地域がところどころにありますけれども、メラネシアの文化と社会組織が目立ちます。

今日本に住んでいることで、少なくはない数の文化についてのわたくしの知識が増すことでしょう。日本はその文化と伝統の点で豊かです。このことがここに来て勉強しようとした理由のひとつです。日本のことばとその人たちの魅力もまたわたくしをこの国に呼び寄せました。先にいいましたように、日本とソロモン諸島を比較しますと、大変な違いがあります。まず第一に、ことば、生活ぶりそして生活方法が違います。(ソロモン諸島は)多分東京ほどは忙しくはなく、幾分鹿屋のようです。米が主食という点で食べ物は似ています。けれども、普段なまものは食べません。去年は、食べてみるのを夢見ていたたくさんの色い로운おいしい料理を味わいました。はじめておスシを食べてみた感じは良かったとはいえません。その味に慣れるまで、わたくしは何回も何回もそれを食べました。つい最近、あの強力なワサビを克服しました。涙が出て来なくなったことにびっくりしました。どうしてかという、以前は涙がぼろぼろ落ちてきたことがまったくはつきりと頭に浮かんで来るからです。まだまだいいたいことがありますけれども、そのようなことが非常に多いので、どこからいい出したらよいのかわかりません。

ソロモン諸島と比べて現代の日本はすごい開きがあります。東京のことを知っているのですが、ソロモン諸島は物事がゆっくりと進んで行くまったくのんびりとした国です。みんな、なにかするにしても急ぎません。

日本とソロモン諸島はふたつの国として違うとはいいますが、多分文化と伝統はどこかしら似ています。わたくしはここでうちにいるのと同じようにくらしていると感じていますし、人びとはすばらしく、環境もすてきです。くらして勉強をしてそして友達を作るのにすばらしいところです。(耳を傾けていただきまして)ありがとうございました。』

以上の話しの補足として次に述べる事情をご理解いただきたい。

まず、メラネシア全体にピジン英語が広まった経緯についてである。それは、19世紀後半にオーストラリアのクイーンズランド州東岸域にサトウキビの大だいたいな農園が多数成立し、そこへソロモン諸島を含むメラネシア全域から何万人というひとびとが労働者として出稼ぎに行ったことによる。ピジン英語はその単語の多くを英語から取り入れているものの、そのほかのヨーロッパ語たとえば、フランス語、ドイツ語らしきものもいくらか混ざっている。また、その基本文法は現地語の要素を基礎としており、くずれた英語とみなすのは必ずしも正しくない。

ヒリーさんが住んでいたのは、ソロモン諸島国内で最も国際的ネットワークのきずなの強い首都のホニアラなので、今はすべて輸入品である米を盛んに食べていたのであるが、いなかにいるひとびとの主食は米ではない。現在は、ソロモン諸島人の大多数のおもなエネルギー源はサツマイモで

ある。国際統計によると、国民ひとりあたりのサツマイモ生産量の世界一は、ほかならぬこの国となっている。ただし数十年前までは、サトイモの仲間のタロいもかヤマノイモの仲間のヤムいもの方をサツマイモよりはるかにたくさん食べていた。

ソロモン諸島では、サツマイモをはじめとするいも類はほとんど焼き畑で作る。焼き畑農業は機械化する前の段階では、ほかの在来農業様式よりも労働生産性が高いといわれており、したがって、のんびりとした生活ぶりでも十分食べるものがまかなえる。わたくし自身の調査結果でも、焼き畑民は通常は週休3日で、畑での労働時間は週20時間以下であった。

付記：日本語を習い始めてからの日も浅いのに、ヒリーさんがおどろくほどわかりやすい日本語を話したので、聞いていた人からは賞賛の拍手が自然とわきあがった。

参考図書

(最近になってソロモン諸島についての概説書が出版されたので紹介する。)

秋道智彌・関根久雄・田井竜一（編）『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』明石書店、1996。